# 文語率

前中　映

文語短歌と口語短歌の割合はそれぞれどのくらいになっているのだろうか。世代によって口語短歌の割合はどれほど違うのか。その違いを数値化することはできるだろうか。二〇二五年五月のコスモス全国大会におけるパネルディスカッションのテーマ「文語と口語」についてあれこれ考えていたときに思いついたのが文語率である。

野球では投手が九回投げるごとに何点取られるかを表す数値を防御率と呼ぶが、それと同様にある個人または集団が一定の歌数の中で文語表現を何回使ったかを計算すれば文語使用の頻度を数値化できると考えたのである。

そこで手元にあった二〇一五年二月発行の「ＣＯＣＯＯＮ」三十五号と同年三月発行の「灯船」三十六号（いずれもコスモス短歌会の結社内同人誌である）の作品すべてを調べて文語を数え、文語率を算出してみたのだが、その結果を述べる前にいくつか補足しておく。

まず、文語率は「十二首ごとに使われた文語表現の数」とした。十二首にしたのは「灯船」と「ＣＯＣＯＯＮ」のいずれもが基本的に一人十二首の連作を掲載しているため計算がしやすかったからで、特に必然性はない。

次に文語の数え方についてだが、何をもって文語とするかという厳密な定義づけはせず、一般的に文語表現とされる用語（「けり」「美し」「落つ」「まなぶた」など）を文語とした。また、単語単位ではなく文節単位で数えた。例えば「なりにけるかも」は単語としては複数だがこれを一つとして数える。また、たとえば「われ」は文語と判断できるが「わが」になると迷うことがある。「わが家」「わが国」などは口語表現でも使うからだ。こういうものはその時々で判断するしかない。もちろん定義が厳密でなければ数値も厳密なものにはならないが、傾向を知るための計算だから厳密さはある程度犠牲にしてもいい。

文語率の計算方法は簡単だ。「文語の数×１２÷歌の数」で出せる。もしあなたが自分の歌を三十首調べて文語が二十個あったら２０×１２÷３０＝８、これがあなたの文語率となる。興味がわいたら計算してみてほしい。もちろん歌数が多いほど数値は正確なものになる。

さて、前述の計算結果だが、「灯船」の文語率の平均は十三・二、「ＣＯＣＯＯＮ」のそれは四・九で大きな違いがあった。ベテラン会員の多い「灯船」と若手会員の多い「ＣＯ

ＣＯＯＮ」では文語と口語の使用についてかなりの差があることがわかる。ただ、これは単純に「文語を使わない人が若手に多い」ということを示しているわけではない。というのは「ＣＯＣＯＯＮ」に作品を寄せている三十二人のうち文語表現がひとつもないのは五人だけ、つまり八十％以上の人が文語を使っているのである。それなのに文語率が低いのは、ひとりひとりが使う文語の数が少ない、つまり文語と口語の併用が進んでいるからである。文語率が五以下の人を見ると「ＣＯＣＯＯＮ」では十四人で四四％だが、「灯船」は十％しかいない。ちなみに文語率０は「灯船」ではひとりもいない。逆に文語率十五以上は「灯船」では三十五％にのぼるが「ＣＯＣＯＯＮ」にはひとりもいない。

文語口語併用の作品を見てみよう。例えば大西淳子（文語率九）の連作には

東京の夜ってキレイ光だけライブカメラは
映していった

という口語の歌もあれば

不規則に霰は降りてありてなきプライオリティ　一度に一歩

という文語の歌もある。三沢左右（文語率六）も

ここからが正念場だと言ふわれのみづから
正念場にはをらず

しゃうねんば、つてなんだらう知らないが
多分仏教そして説教

の二首を並べている。また、久保田智栄子（文語率八）の

おぢいさんの墓標はたしかウルトラマン石
のゆびさき宇宙を指せり

の上の句はひとりごとをそのまま書き留めたようなナチュラルさだが結句は文語で収めているし、斎藤美衣（文語率六）の

その洞はしん、と小暗く冷えてをりよその
おうちのスリッパを履く

は三句切れの述語が文語だが、下の句にはおよそ文語になじまない「おうち」が使われている。

文語と口語の併用は、定型におさめるための音数あわせという場合もあるが、ここに挙げた作品では併用が独特の味わいを生んでいるように感じられる。

もちろん「灯船」にもそういう歌はいくつもあるが、こちらには文語のヘビーユーザーも多い。例えば黒岡美江子（文語率二十一）の

こぞ会ひしおうな無事らし川ちかき道陸神
に柿供へあり

や田宮朋子（文語率十八）の

来し方はたれも知らねど小堂に八百歳の釈
迦仏います

では文語にできるところはすべて文語で表現されている。これらの作品から先に挙げた文語口語併用の歌とは異なる味わいを読み取ることができよう。

ここまで「灯船」と「ＣＯＣＯＯＮ」を比較してみたが、「コスモス」ではどうだろうか。同年五月号の「コスモス」

を調べてみたところ、〈スバル〉〈シリウス特別作品〉〈その一特選〉ではいずれも文語率が十三から十四、〈あすなろ特選〉は十一だったが、〈その二特選〉になると急に下がって六・六だった。若い人の多い〈その二〉では「COCOON」に近い数値が、年齢層の高い〈スバル〉、〈シリウス〉、〈その一〉では「灯船」に近い数値が出るということであろう。

ここからは少し時間を遡って見てみよう。

今から八年前の「コスモス」二〇一八年八月号。私がコスモス短歌会に入会して初めて歌を出したのがこの号なのだが、ここでの〈その二特選〉の文語率は九・五だった。現在ほどではないにせよ他の欄に比べると低いようだ。

それが更に遡って十九年前、二〇〇七年の同じ〈その二特選〉では十六・一という高数値が出た。口語短歌普及の原動力になったとされる俵万智の『サラダ記念日』が出版された一九八七年から二十年ほどを経たこの年になってもコスモス会員にとって「短歌＝文語」だったようだ。

ところでこの『サラダ記念日』の文語率はどうなのだろう。気になったので全ての歌を調べてみたところ、文語率は七・四だった。先に挙げた今年の「COCOON」や「コスモス」の〈その二集〉より高い。どうだろう、意外に思われただろうか。ご存じの人も多いと思うがこの歌集にはかなりの数の文語が使われているのである。ただ、よく知られている「サラダ記念日」の歌や「カンチューハイ」の歌、「寒いね」の歌などには文語表現はない。また俵の歌の特色は口語の多用だけではなく、当時の若者の感覚に寄り添った題材を積極的に詠んだという点にある。そのことが短歌に馴染みのない人にも彼女の歌を受け入れやすいものにし、俵万智＝口語というイメージを定着させたのだろう。

さて、ここまで調べた範囲では、今から二十年ほど前には文語がメインだったコスモスの歌が、ある時期（およそ十五年から十年くらい前）から現代に至る間に若年層を中心として口語を取り入れていったことがわかる。この詳細や要因について述べることは私の力に余るが、たとえば、今年四〇歳になるコスモス会員（仮にAさんとしよう）が二〇歳のときに歌を作り始め、三〇歳でコスモスに入会したというモデルを設定すると、Aさんが作歌を始めたのは二〇〇六年、コスモス入会は二〇一六年となる。このくらいの年代から文語使用を減らして口語を増やす流れができてきたと見るのはそれほど的外れではないだろう。

歌人がその文体を選ぶ（意識的にせよ無意識にせよ）際に大きな要因となるのは、作歌を始める前または作歌を始めた時期、歌の基礎を学んでいた時期にどのような歌を読み、どのような歌に惹かれたか、ということだろうと思う。とするとこのAさんが一九九〇年代後半から二〇〇〇年代（いわゆるゼロ年代）くらいに世に出た口語短歌を多く読み、それらの歌に影響を受けたとすれば、自分の歌も口語メインになることが考えられる。髙良真実の『はじめての近現代短歌』を開くと、この時期に登場した口語派の歌人として枡野浩一、雪舟えま、笹井宏之、斉藤斎藤、少し遅れて永井祐などの名

前がある。また高良が「その後の世代に計り知れない影響を与え」たと評する穂村弘の入門書『短歌という爆弾』と、『かんたん短歌』というコンセプトが口語短歌を作る若手層に影響を与え」たと評する枡野浩一の『かんたん短歌の作り方』がどちらも二〇〇〇年に出ている。Aさんがこれらの歌や論を読み、総合誌などでも触れていればその影響を受けたことは想像に難くない。

ただ、この時期に作歌を始めた人がみなAさんのようであったということではない。Aさんと同時期に作歌を始めたとしても、ある人は古典和歌に、ある人は近現代の文語歌人に、またある人は文語と口語を巧みに併用する現代歌人に惹かれて作歌を始めているはずだ。そのような人たちの中で文語は使われ続けているし、これからも使い続けられていくだろう。だから、やがて「コスモス」の歌が口語ばかりになってしまうということはないはずだ。世代交代が進むにつれて全体としての文語率は更に下がり、口語メインや文語口語併用の会員が増えるだろうが、〈すべて口語〉派から〈文語多用〉派までさまざまな文体の会員が混在するという状況は変わらないと私は思っている。

コスモスの外に目を向けても同様のことが言えよう。まず、若年層の間で口語化の流れが続いていることは間違いない。例えば、昨年の短歌研究新人賞の受賞作、次席作品、候補作品の文語率の平均はなんと〇・六。全員がすべて口語かほとんど口語になっている。

だが一方、角川短歌賞受賞作品の文語率を調べてみると、一昨年の平井俊（応募時の年齢三十三歳）が十三・二、昨年の船田愛子（二十歳）に至っては二三・八である。これは文語のヘビーユーザーと呼べる数値であり、彼ら彼女らは文語を表現手段として積極的に選んでいる。

歌集や歌書をほとんど読まず、五七五七七の言葉遊びを楽しむだけの層は別として、それなりに勉強している人であれば自己の文体に意識的になるのは当然だし、過去の歌人達の作品を読めば文語短歌に触れるのも当然だろう。そうであれば、自分の作品の文体として文語を選ぶ人が一定数存在し続けることも自然であるように思われる。

パネルディスカッションを終えた後、会場のトイレで会った年配の会員の方が、これまで歌は文語で詠めと教わってきたけれど、今日の話を聴いて自分も口語を取り入れてみようかなと思った、と語ってくれた。

「多様性」という言葉を安易に称揚するつもりはないけれど、少しでもいい歌を作ろうという意識を持っているのであれば選択の幅は広い方がいい。短歌は文語が当たり前と思っていた人にはぜひ口語にも目を向けてもらいたいし、文語は難しいから口語でいいやと思っていた人にはぜひ文語の勉強もしてみてほしい。また安易に文語と口語を混用していた人はもう一度表現を見直してほしい。それぞれの会員が自分にあった文体を探っていければ歌作りの楽しみも作品の味わいもより深いものになり、「コスモス」の歌が更に充実したものになっていくはずだ。